

付加価値を得る。いわばタイタニック号は後世に提供すべき見世物を準備する、死せる苗床となったわけだ。そしてこのタイム・カプセルを開くことは、死をも見世物にするおぞましさと無縁ではいられない。おまけにそこには「超豪華な一等客室から、アメリカへの移民がひしめく三等客室まで、あるいは広々とした一等船客用のプロムナードから、火夫たちが石炭を運ぶ作業に追われるボイラー室まで」の、1912年現在で凍結された、第一次世界大戦以前の階級「社会の縮図」（内野儀）が温存されている。これみよがしの虚栄と隠された悲惨な労働の対比。そしてBGMには沈没まで演奏を続けたというバンドの伝説。かくしてタイタニックは「死の舞踏」の具現と化す。

中世以来の寓意を演じたその虚実皮膜の延長に、やがてフェリーニの『そして船は行く』が生まれるだろう。目的地に到達せぬ、帰らざる旅程なればこそ完璧、との逆説は同じ北大西洋航路上でマルセル・デュシャンの脳裏に閃いたアフォーリズムでもあったはずだ。

*Tag Gronberg "An Object Manufactured for Exhibition at the Bottom of the Sea" from *Memory and oblivion*, Amsterdam, 1-7 September 1996; ロビン・ガーディナー&ダン・ヴァン・ダーヴァット『タイタニックは沈められた』内野儀訳、集英社1996。

連載②
墓場暴きの倫理
 タイタニック号 — その沈没後の運命

三重大学・フランス文学
稲賀繁美
 Inaga Shigemitsu

1912年4月15日、巨大豪華客船タイタニック号は、その処女航海の途上、北大西洋航路で、氷山に接触して沈没した。一千五百余の人命を奪ったこの海難は、以来多くの伝説を育んできた。それから82年後の1994年、イギリスの国立海事博物館ではタイタニック号の遺品展が開催された。その地味で一見科学的な「展示」の陰には、意外な倫理的問題が潜んでいた。

タイタニック号の残骸は、すでに1985年に、北大西洋の水深四千メートルの海底に発見され、以来6回の調査によって、三千六百点にのぼる遺品が引き上げられた。この「宝探し」に関与したRMSタイタニックは、ニュー・ヨークを拠点とするヴェンチャー・ビジネス色の濃いサルヴェージュ会社。そんな一獲千金狙いのいかがわしい事業に国税を投入するとは不見識とする批判が起こったが、その裏には、自分たちの親族の眠る海底の墓地を無断で荒らす「盗掘者」たちへの、遺族側の心情的な反発もあったらしい。ひたすら発掘し展示することを「是」とする考古学・博物館学が、その科学性の根拠において「非」を突き付けられた。科学的調査の美名も、投機がらみの非道徳的な動機を隠蔽する口実に過ぎない、というわけだ。

地上にあったなら骨董としてさして価値もないであろう食器や日常品すら、かのタイタニック号とともに海底に80余年眠っていた、というだけで、天文学的な